寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生 ⑥2

株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員 清水 秀幸

14 新田町交差点周辺を考える

人口減少局面に入った現在、日本の都市計画は中心とその周辺を明確に意識した建ぺい率・容積率を指定する傾向にあり、中心市街地に位置する土地については、行政はもとより、その地権者や周辺も含めた相互理解を前提とする高密度な空間造形への協力が強く求められることは、前回の項で述べてきた通りである。

そして、さらに同交差点界隈の賑わいを創生していくために、もう一つの必須要件は「光」による賑わいの演出効果である。

光には癒しの効果とともに、人の身心を活性化させる覚醒効果や躍動効果がある。同界隈には残念なことにその光がほとんど存在しないのである。

薄暮以降、その界隈のそれといえば、往き交うクルマの前照灯と信号機からの点滅灯が大半であり、夜の7時をまわると漆黒のまちと化す。

その最たる存在は、交差点南西角地のもんぜんぷら座の全面窓なし壁である。現在、もんぜんぷら座として使用されるそのビルの全身はダイエー長野店であり、1976（昭和51）年に築造されたものである。

その当時、いかなる意図によって全面壁構造を採用したのか知る由（よし）もないが、今となっては人々の滞留・回遊空間を造形するうえで、極めて足枷（かせ）となっていることは、否めない事実である。

先に述べたように、同交差点の二つの角地を占める銀行所有地が、複合機能を有した高層建物として再生し、もんぜんぷら座の全面壁構造が改修され、ビルの内からの光が交差点を明るく照らす時、その新田町界隈は、過去の栄華を彷彿とさせる一帯に生まれ変わることは必定なのである。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長